

宮澤賢治「文語詩稿 五十篇」評釈 十

信 時 哲 郎

46 「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」

① 「玉蜀黍を播きやめ環にならべ、
さんさ踊りをさらひせん。」
開所の祭近ければ、
技手農婦らに令しけり。

② 野は野のかぎりめくるめく、
まひるをひとらうちをどる、
青きかすみのなかにして、
袖をかざしてうちをどる。

③ さあれひんがし一つらの、
所長中佐は胸たかく、
うこんざくらをせなにして、
野面はるかにのぞみゐる。

④ 「いそぎひれふせ、ひざまづけ、
みじろがざれ。」と技手云へば、
種子やまくらんいこふらん、
ひとらかすみにうごくともなし。

語注

玉蜀黍 トウモロコシ。「文語詩稿 一百篇」所収の「塔中秘事」に「玉蜀黍」とルビが打たれていることから、ここでも音数の関係から「キミ」と読ませるつもりだったのだろう。

開所の祭 胆沢郡金ヶ崎町六原にあった軍馬補充部六原支部（現在は岩手県立農業
大学がある）の開所を祝う祭り。同支部は明治三十一年五月一日に開設され

た。

さんさ踊り 旧盛岡藩の内陸部で広く踊られていた盆踊り。衣と腰帯をつけ、太鼓と笛、歌にあわせて早いテンポで踊る。

うこんざくら 八重咲きするオオシマザクラ系のサトザクラで、淡黄緑色の花を咲かせる。ソメイヨシノ等に比べると開花期が遅いので、農学校の一行が訪れた時は、まだ、あまり開花していなかったと思われる。

所長中佐 軍馬補充部の所長である陸軍中佐。

大意

「トウモロコシを播くのはやめて輪になろう、開所の祭りも近いので、さんさ踊りのおさらいをしようじゃないか。」技手が農婦たちにそう命令する。

広い野原いっぱい、目がくらまんばかりの青い霞のなかで、真つ昼間から農婦たちは集まって踊る、袖をかざしては踊りに踊る。

しかし東には一列並んでいる、ウコンザクラを背にして、軍馬補充部の所長中佐が胸を張って、野原を広く見渡している。

「急いでひれ伏せ、ひざまずけ！ 動くんじゃないぞ。」と技手が言うと、種を撒いているのか休んでいるのか、農婦たちは春霞の中を身動きもしなくなつた。

モチーフ

農学校の遠足で見た一光景から作り上げた人間カタログ。作業の合間にさんざ踊りの練習をする農婦と、その境遇を十分に知りながらも職責を意識して躍りを制止せざるを得ない技手。所長である中佐は、あくまでも誇り高く、土を触ることもなければ、踊りの輪に加わることもない。同じ場所にいながらも、それぞれ別世界に属するかのような三者を描いている。

評釈

黄野(220行)詩稿用紙に書かれた『新校本全集 第五卷』に口語詩として収められた「軍馬補充部主事」に手入れる形で文語詩化されたものが下書稿(一)、その余白に書き直された下書稿(二)、そして定稿が現存。生前発表なし。

先行研究は、島田隆輔「宮澤賢治と軍馬補充部 桑島重三郎記念館所蔵資料紹介を中心に」(『賢治研究63』・平成六年四月。宮澤賢治研究会、佐藤浩子「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」)、『宮澤賢治 文語詩の森』・平成十一年六月・柏プラーノ)、對馬美香「賢治作品に見る郷土史」(『宮澤賢治新聞を読む』・平成十三年七月・築地書館)など。

まず「軍馬補充部主事」の最終形態を掲げることとする。

うらうらと降ってくる陽だ

うこんざくも大きくなって

まさに老幹とも云ひつべし

花がときどき眠ったりさめたりするやうなのは

自分の馬の風のためか

あるひはうすい雲かげや、

かげらうなぞのためだらう

よう調教に加はって

震天がもう走って居るな

膝がまだ癒り切るまい

列から出すとい、んだが

いやこ、まで来るとせいせいする
ひばりがなくて

はたけが青くかすんで居る

その向ふには経塚岳だ

山かならずしも青岱ならず

残雪あながちに白からずだ

五番の圃地を目的に

青塗りの播種車が

から松をのろのろ縫って行くのは

まづ本部のタンクだな

いやあ、牧地となると

聯隊に居るときとはちがつて

じつにかんかんたるものだ

しかしながら

このやうな浩然の大气によって

何人もだらけぬことが肝要だ

ところが何だ、あのさまは

みんなびたつと座り居る

このまっぴるま

しかもはたけのまんなかで

さんざ踊りをやり居って

誰か命令したやうに

びたりとみんな座り居った

おれのかたちを見たんだな

雇ひ農婦どもの白い笠がきのこのやうだ

まだじつとしてかゝんでゐるのは

まるで野原の生蕃だ

いったい何といふ秩序だ

あすこは二十五番の圃地だ

けさ高日技手が玉蜀黍を播くとか云って

四班を率ひて行き居ったのに

このまっぴるま何ごとだ

しかもあの若ものは乗馬づぼんに

ソフトカラなどつけ居って

なかなかづ太いところがある

一番行つてどなるとするか、

大人気ないな

ははあ開所の祭りが近い

今年もやっぱり去年のやうに

各班みんな競争で

なにか踊りをやるんぢやな

もちろん拙者の意も迎へ

衆もたのしむつもりぢやらう

それならむろん文句はない

馬のかしらを立て直しぢや

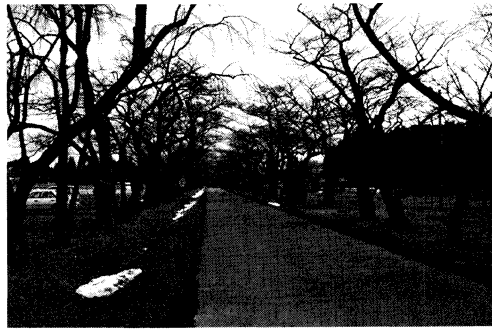
粹な親分肌を見せるのは

かう云ふときにかぎるんぢや

さっきのうこんざくらをつんで

家内に手紙を書くとしやう

島田隆輔（前掲）は、大正十一年の六原支部創立二十五年祝典が開催されたことを念頭において、「ははあ開所の祭りが近い／今年もやっぱり去年のやうに」という部分を読み、賢治が本作を取材したのが大正十二年春であったとする。が、『新校本全集』の年譜には、大正十三年四月二十九日に農学校の職員生徒と共に六原支部に遠足に行ったという記事が載っている。この時のことであったとすべきだろう（もちろん前年に訪れなかったという証拠にはならないが）。島田によれば、千葉嘉は「お祭りのことは、後にも先にも二十五周年記念祭一回だけ」と語つ



岩手県立農業大学校の桜並木

たこのことであるが、佐藤誠治の「軍馬補充部六原支部の思い出」によると、「毎年五月一日にはお花見を兼ねて運動会が行われた」（『桑島重三郎記念誌』・昭和五十三年・桑島重三郎記念誌編集委員会、未見）とのことなので、「祭り」ではなかったとしても、運動会で発表するためにさんざ踊りを練習していた可能性は十分にあり、賢治たち一行はそれを見たのだろうと思われる。

先行作品である「軍馬補充部主事」は黄野（220行）詩稿用紙に書かれているが、この用紙は昭和に入ってから使われたもので、大正十三年当時には使用されていない。従って「軍馬補充部主事」は、大正十三年の取材を昭和に入ってから書き換えたものであることになる。これに先行する作品は見あたらないが、ちょうど「春と修羅 第二集」の作品番号で言うと七九〇八五の間に欠番があり（期間で言えば一九二四年四月二八日～五月三日の間）、初期の段階の原稿はここに属していたのだろうと思われる。

さて、この「軍馬補充部主事」は、視点人物が軍馬補充部の主事となっていることからわかるように、実際に見たままを書いた作品ではない。しかも、農学校の教員も生徒も全く登場していないことから、現存する口語詩の段階で、実体験に基づきながらも、かなりの虚構化・物語化が進んでいたことが窺える。事実に基づいていたと思えるのは、農婦たちがさんざ踊りの練習をしていたこと、そして踊りがびたりと止まったことくらいであろうか。踊りが止まってしまった理由については、主事が想像するところだったのかどうかは判断しにくい。同支部で働いていた千葉嘉によれば、「人夫たちが午前十時に休む時間が十五分あり、その時間を利用して踊りの練習をしたので、畑の中で休んだのです。午後にも三時に十五分の休憩があり、それを利用して練習したのです」とのことなので（島田・前掲）、たまたま十五分の休憩時間が終わったから踊りの練習も終わっただけだというのが、即物的ではあるが、最も事実に近いのではないかという気もする。

これが、文語詩化の段階で、視点人物は主事を離れた第三者、すなわちここを訪れた賢治のものに近くなり、技手の役割も大きくなって、農婦たちに踊りの練習をするようにけしかけ、また、「所長中佐」の姿を認めたためにそれをやめるように命令をしたという風に書き換えられている。虚構化が進んだのか実体験に近づいた

のかは一概に言えず、どこからどこまでが事実であったのかも詮索しにくい、確かなことは文語詩化の段階で「所長―技手―農婦」というピラミッド型の社会構造がはっきりと描き分けられるようになったということであろう。

ところで、取材時の賢治は知らなかったことだが、舞台となった軍馬補充部六原支部は大正十四年十月三十日に廃止されている(島田の調査によれば、六原支部の廃止は大正十四年四月十五日の『岩手日報』で、初めて報知されたという)。賢治は「春と修羅 第二集補遺」の「朝日が青く」(三六八 種山ヶ原 一九二五、七、一九)の発展改作形^①で、六原支部の廃止を次のように書いている。

軍馬補充部の六原支部が
来年度から廃止になれば
〔約三字空白〕産馬組合が
払ひ下げるか借りるかして
それを継承するのだけれども
組合長の高清は

きれいに分けた白髪を
片手でそつとなでながら
ひとつ無償でねがひたい

われわれ産馬家といふものは
政策上から奨励されて
間にも合はないこの事業を
三十年もやってきた

さうしてそれをやったものは
みんな貧乏してゐると
さういふことを陳情する

昭和になって口語詩を書き直した賢治、そして文語詩として書き改めた賢治は、もちろん六原支部の廃止も、農民たちがそれによってどういう影響を受けたかも知っていたはずだ。「胸高く」を、佐藤浩子(前掲)が言うように、馬上の中佐を表した言葉であると解釈すると、彼ら三者の立場は、いっそう解りやすくなる。すな

わち姿勢正しく馬上にいる中佐。中佐の顔色を窺いながらも農婦たちと接する立場にある技手。そして命じられるままにひれ伏し、ひざまずき、身動きすらない農婦たち：「軍馬補充部主事」の文体と内容から、ユーモラスな作品とのみ読まれてしまふかもしれないが、岩手の農民とその社会的な位置がしっかりと刻印された作品だと言つていいように思う。

47 「うからもて台地の雪に」

①うからもて台地の雪に、
部落なせるその杜動し。

②曙人、馮りくる児らを、
穹窿ぞ光りて覆ふ。

語注

うから 「やから」と同意。親族のこと。

曙人、馮りくる児ら 曙人に振られたルビは遠つ親、つまり先祖のこと。下書稿(一)では、「ともすれば遠き曙人らに／返らんとその血はたぎつ」で完結していたので、「遙か昔の祖先たちの生活にもどろう」といった意味を込めたかっただのと思われる。『新語彙辞典』では、「馮」を字義通り「たよる」と解して、「うから(親族)の曙(夜明け)をもたらしした人(つまり大先祖)が馮りくる(頼ってくる)多くの子らを、あたかも天が慈愛の光でおおうように守っている」(一)内は原文どおり)と訳している。が、賢治は下書稿(一)～(三)では「憑」の字を使い、定稿でのみ「馮」の字を使っている。『新校本全集』では、下書稿段階での「憑」の字を「馮」の誤りだとしているようだが、その逆を考へることもできるように思う。すなわち、定稿のみが書き誤りで、賢治が「憑」と書くつもりでいたという可能性である。もし、「憑」であったとすれば、「憑」のりうつる」の意があるので、田口昭典(後掲)のように、「曙人」を東北人の祖先である縄文人であると解し、「この部落には、遠い人類の祖先(原人あるいは縄文人)のり移ったような児が生まれてくることがある」(一)

内は原文どおり」と解せることになる。本論の立場もこれに近い。賢治は「一〇六〔日はトパーズのかけらをそ、ぎ〕一九二四、五、一八、」の手入れ段階で、「沼はむかしのアイヌのもので／岸では鎌も石斧もとれる」と書いていることから、東北の先住民がアイヌだと考えていたことがわかるので、賢治は人々にアイヌの魂のりうつった状況を考えていたのだと思われる。

大意

雪の積もった台地に一族が集まり、集落をなしたその森が黝く見えている。

遠い祖先の血をひき、魂も乗り移った子供たちを、天空から降り注ぐ光が覆っているように見える。

モチーフ

岩手の山村に生きる人々は貧しい生活を余儀なくされていた。しかし、ここに住んでいた祖先たちは、きつと希望に溢れて、この地で生活していたのであろう。今こそ、その記憶を甦らせ、祖先たちと同じように希望を持って生きて欲しい。暗い山村に明るい陽光が差している様子から、賢治はその集落にも天からの恵みが降り注いでいることを感じ、原始共産制的な、つまり政治的抑圧や経済的格差とは無縁の社会を幻視したのではないだろうか。

評釈

黄野（260行）詩稿用紙の裏に書かれた下書稿(一)、その余白に下書稿(二)、黄野（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿(三)、定稿の四種が現存。生前発表なし。

先行研究に岡井隆「『文語詩稿』の意味」（『文語詩人 宮澤賢治』・平成二年四月・筑摩書房）、田口昭典「文語詩に見る縄文」（『縄文の末裔・宮澤賢治』・平成五年五月・無明舎）、島田隆輔「宮澤賢治・文語詩稿五十篇／〈詩系譜〉の論へ」（下）

〔翔けりゆく冬のフェノール〕 試注から」（『論攷宮澤賢治2』・平成十一年三月・中四国宮澤賢治研究会）、水上勲「宮澤賢治文語詩に関する二、三の問題」（『帝塚山

大学人文科学部紀要1』・平成十一年十一月・帝塚山大学人文科学部）などがある。

島田隆輔（前掲）は、「『文語詩未定稿』の「〔洪積の台のはてなる〕」の原稿の裏面に本作の下書稿が書かれていたことに関連を見ようとしているが、この考えを延長していくと、「〔洪積の台のはてなる〕」に「鍛冶町」や「教諭白藤」が出てくることから、賢治が独居自炊した桜の宮沢家別荘あたりが舞台であったということになりそうだ。また、「『文語詩未定稿』の「〔館は台地のはななれば〕」に、桜の別荘を「台地のとつばな」と書いている例があり、岡井隆（前掲）も「〔うからもて台地の雪に〕」について、「宮沢一族のことを頭にうかべて歌っているのだろうと（勝手に）解釈している」（一）内は原文どおり」とする。ただ、宮沢一族が桜に集まって住んでいたというのは実際と合わないし、花巻全体を「部落」と解釈するのもためらわれる。宮沢家に生まれてくる人達を祝福しているかのような記述も、賢治の日頃の言動からするとそぐわないように思う。

そこで作品の取材地を花巻以外にも広げてみると、本作と共通した言葉や状況のある『春と修羅 第二集』の「七五 北上山地の春 一九二四、四、二〇、」を、先行作品として挙げる事ができるのではないかと思う。賢治は大正十三年四月、種馬検査を見学するために、まだ雪の残る外山高原を夜通し歩き、外山にあった岩手県種畜場を訪ねたが、その時の作品である。口語詩の最終形態を挙げてみよう。

雪沓とジュートの脚絆

白樺は焰をあげて

熱く酸っぱい樹液を噴けば

こどもはとんびの歌をうたって

狸の毛皮を収獲する

打製石斧のかたちした

柱の列は煤でひかり

高くけはしい屋根裏には



種馬検査所があった外山（蛇塚）の平地

いま朝餐の青いけむりがいつぱいで
大迦藍カトドラのドーム(穹窿)のやうに

一本の光の棒が射してゐる

そのなまめいた光象の底

つめたい春のうまやでは

かれ草や雪の反射

明るい丘の風を恋ひ

馬が蹄をごとごと鳴らす

台地と山地ではずいぶん違うが、その他に関しては、まず季節が一致しており、「打製石斧」という語も、文語詩の「曙人」や、文語詩の下書稿(一)で「原人の」と書きかけていたことと関連しそうだ。一本の光が「穹窿」の中に降り注ぐように差し込んでいるのは、「穹窿」の語で空全体を表しているように見える文語詩とは少々ズレているかもしれないが、両詩の関連性を指摘するには十分であろう。

朝になって外山の集落にたどりついた賢治は、その裕福とは言えそうにならない暮らしぶり、何世代にも渡って馬と共に暮らし、今日も何世代も前の人々と同じような朝食をとろうとしている彼らの生活に目が向いたのだろう。

秋枝美保(「起源への廻行」・『宮沢賢治 北方への志向』平成八年九月・朝文社)によれば、『岩手日報』(大正十一年七月十日)に掲載された「スケッチの旅」に、「ある山間での生活風景が、「原始時代其儘な自給自足の生活」という見出しで報告されている。そこでは、人々は、「橡の実」を食料としており、記者が通りかかったとき「山男の様な巨漢達」が、「地慣し」をしたり、粘土を運んだり、樹を切ったりして、「炭焼かま」を築いているところであったという。この光景について、記者は、「先住民族の片影!! 私は一種の幻滅の悲哀を感じざるを得なかった」とあったことを報告している。賢治がこの記事における「原始時代」や「先住民族」といった言葉に影響されたときまで言うつもりはないが、町に住む新聞記者にとって山村の生活がそのように見えたのと同じように、町に住んでいた賢治にも、彼らの生活は「曙人」を思わせるものに映ったとしても不思議ではない。

マルクス経済学によると、原始共産制下では、生産力こそ低くても搾取の可能性

も低かったため、政治的抑圧や経済的格差もなかったという。その意味で、「曙人」の住んでいた頃の山村は、生活こそ豊かでも、平和で安定した社会を維持できていたのだろう。しかし、生産力が低いままに近代日本の政治体制・経済体制に巻き込まれた山村は、今までに経験することのなかった貧しさ、厳しさを経験させられることになった。本作には、太古の祖先たちの生活を賛美する中に、近代日本への批判が込められていたと言ってもよいように思う。

48 「残丘の雪の上に」

①残丘モナドノックの雪の上に、

誰かは知らねサラアなる、

二すじうかぶ雲ありて、
女のおもひをうつしたる。

②信をだになほ装へる、

なにとできみはさとり得ぬと、

よりよき生へのこのねがひを、
しばしうらみて消えにけり。

語注

残丘 古い山地は浸食作用によって長い間に平坦化させられていくが(準平原)、浸食から取り残されたままに突起した丘陵が残ったものを残丘モナドノックという。モナドノックとはアメリカのニューハンプシャー州にある山の名前で、これが地形学の用語ともなっている。本作では、蛇紋岩でできていたために浸食されなかった北上山地の最高峰である早池峰山(一九一七m)をモナドノックと呼んでいる。

サラア 先行作品である口語詩「(うすく濁った浅葱の水が)」の下書稿に「俸給生活者」のルビがあることから、本作のモデルとなった女性が、当時、サラリー(ウー)マンであったことを指すと思われる。ただ、『新修宮沢賢治全集』の「語注」では、「旧約聖書に出る絶世の美女サラア(アブラハムの異母妹にして妻、イサクの母)をも連想したものか」とあり、濱下昌宏(後掲)もこれに従っている。

大意

残丘とされる早池峰山の雪の上に、二筋のうかぶ雲があり、誰なのかはわからないけれど、そこには俸給生活者である女性の思いが映っているようだ。

「自らの信仰であるとさえ装って、よりよい人生を実現しようと思うこの願いを、

どうしてあなたはわかってくださらないのですか」と、しばらく恨みごとを言ったかと思うと消えてしまった。

モチーフ

自らの信仰をよりどころにして賢治に従おうとした女性がいた。本作は、一見すると、彼女を批判した作品にも見えるが、おそらくは賢治も信仰をよりどころにして彼女の求愛を拒んだわけであり、その意味では五十歩百歩であった。早池峰に浮かぶ雲を見ながら、彼女の気持ち、そして自分の気持ちを冷静に考え直している時の作品であろう。

評釈

先行作品である「春と修羅 第三集」の口語詩、「二〇三九（うすく濁った浅葱の水が）一九二七、四、一八、」の下書稿が書かれた既使用黄罫（240行）詩稿用紙の表に書かれた下書稿（一）と定稿の二種が現存。生前発表なし。

先行研究には小沢俊郎「文語詩に現れた恋愛観」（『四次元70』・昭和三十一年四月・宮澤賢治研究会）、岡井隆「サラアなる女」、「サラアなる女の伝説」（『文語詩人 宮澤賢治』・平成二年四月・筑摩書房）、島田隆輔「宮澤賢治・文語詩稿五十篇／〈詩系譜〉の論へ」（下）（『翔けりゆく冬のフェノール』試注から）（『論攷宮澤賢治2』・平成十一年三月・中四国宮澤賢治研究会）、澤田由紀子「新たな方法への模索 宮澤賢治「文語詩稿」考」（『宮澤賢治研究 Annual 10』・平成十二年三月・宮

澤賢治学会イーハトーブセンター）、久保田恵子「残丘の雪の上に」（『宮澤賢治 文語詩の森 第二集』・平成十二年九月・柏プラーノ）、濱下昌宏「賢治と女性（3） 文語詩に見る〈女たち〉への眼差し」（『妹の力とその変容 女性学の試み』・平成十四年三月・近代文芸社）などがある。

先行研究でも指摘されているように、モデルとなっているのは小笠原（旧姓・高瀬）露であろう。独居自炊時代の賢治に積極的にアプローチを試みたとされ、「聖女のさましてちかづけるもの／たくらみすべてならずとて／いまわが像に釘打つとも」（『雨ニモマケズ手帳』）という詩句のモデルだとも言われる女性である。

「うすく濁った浅葱の水が」の下書稿（一）には「シヨの階級」とあり、『新語彙辞典』では、これを「日本の軍隊の将官（大、中、小）階級」としているが、これは露が小学校の訓導をしていたことから、その「小」を取ったものであろうと思う。これを下書稿（二）では「俸給生活者」と改め、更に文語詩では「サラア」とし、いずれも相手特定させないようにぼかしているように思える。また、口語詩下書稿の段階で「女」「女たち」「人たち」と様々に迷っているが、これも相手特定させないための試みであるように思う。とは言え、これらはプライバシーへの配慮や照れ隠しからくるものではなく、賢治が事実を特定してリアリティを出したいという思いと、特定しすぎることによって広く読者に受け入れてもらうための一般性が失われるのを嫌う気持ちが半ばしていたために起こったことではないかと思う。

文語詩の第二連冒頭には、「信をだになほ装へる」とあり、これを岡井隆（前掲）や久保田恵子（前掲）は、露に宛てた昭和四年の書簡の下書（252a）に「法華をご信仰なさうですが」とあることから、キリスト教徒であったはずの露が法華経を信仰することによって賢治に



小舟渡（イギリス海岸近辺）より早池峰を望む

近寄ろうとしたことを意味すると解している。ただ、「うすく濁った浅葱の水が」の日付が昭和二年四月であることを重視すれば、露が宗旨を変えるよりは、だいたい前のことであつたことになるはずで、少なくとも取材時において、賢治が露のことを恋愛のために宗旨を変える人物であるとは認識していなかったことになる。とはいえ古い段階の下書稿では信仰のテーマが直接に表れていないため、従来の説の有効性は依然として保たれたままである。ただ、「信をだになは装へる」という詩句を、「信仰を装って近づいた」という意味に捉え直せば、昭和二年段階での賢治の言葉であつたとしても解釈できることになる。

森莊巳池は、賢治が「私はレブラだ」と言つて、露を遠ざけようとしたが、クリスチャンの露は逆に殉教的になつて、愛情をかきたてることになつたと書いている(『宮沢賢治の肖像』・昭和四十九年十月・津軽書房)。当時の賢治の心も露の心も本当のところは不明だが、森の言うように露が「信仰を装って近づいた」側面も、おそらくはあつたのだからと思う。森の言葉に曖昧な点があるだけでなく、昭和四年以降の露に関する出来事や印象が盛り込まれていてと考えることもできようし、全くの虚構である可能性もあるが、「信仰を装って近づいた」と解釈すれば、『雨ニモマケズ手帳』における「聖女のさましてちかづけるもの」という言葉とも、うまく合致するように思う。

さて、露に対しては批判的な記述がなされることが多いが、本作の狙うところは「信仰を口実に結婚を迫る女」としての露批判ではなく、むしろ「信仰を口実に結婚を回避しようとした男」としての自分自身への苦い自覚なのではないかと思う。文語詩からは読み取りにくくなっているが、賢治は雲を見ながら、「サラアなる女のおもひ」を想像し、その中に自分自身の姿を読みとっているのである。先行作品である「うすく濁った浅葱の水が」の最終形態では、

それは信仰と奸詐との
ふしぎな複合体とも見え

まことにそれは

山の啓示とも見え

畢竟かくれてゐたこつちの感じを

その雲をたよりに読むのである

とある。久保田(前掲)は、「その女性から、日頃、感じていたものが正しいかどうか、今、女性の心が移っているその雲を頼りに読みとっている」とするが、「かくれてゐた」「こつちの感じ」とは、女性とのやりとりをする際には、気付かないでいた自らの「感じ」を指すと考えることもできるのではないだろうか。

賢治は、最初から露と一緒にいる気などなかったのに、ストリートに断りの文句を伝えることができず、昭和二年頃にも、おそらくは昭和四年に「私は一人一人について特別な愛といふやうなものを持ちませんし持ちたくありません」(小笠原露宛書簡下書・252a)と書いたような言い方で、露を拒絶したのではないだろうか。つまり、露が信仰を装って近づいて来たのは事実かもしれないが、賢治も、これを遠ざけるために、やはり信仰を装って断つたわけである。賢治は、これを「奸詐」であつたと、今、雲を見ながら思い返しているのではないだろうか。

先行作品の発展形である「雲」に、「みなるまことはさとれども／みのたくらみはしりがたし」という言葉があるが、自分自身の誠には気付いても、自分自身がどのような企みをする中に潜めていたかはなかなか認めることができないことであろう。これも一見すると「女」への批判であるようだが、それ以上に自分自身に返ってくる言葉で、露が信仰という「まこと」を主張しながら恋愛を成就させようと「たくらみ」を、信仰という「まこと」でもって隠そうとしていたのである。露の「たくらみ」にはピンと来た賢治だが、自分自身の「たくらみ」には気付かなかつたということのように思える。

賢治は昭和六年七月七日、岩手日報社に勤めていた森莊巳池を訪ね(以下、前掲書による)、「結婚するかもしれません」と伊藤チエとの結婚をほめかけたという。賢治とチエは、一度目は羅須地人協会時代の花巻で、二度目は昭和三年六月に大島で会つており、ちょうどその頃、賢治は友人の藤原嘉藤治に「おれは結婚するとすれば、あの女性だな」と語つたともいう。つまり信仰を装って露の求愛を断つていたのとはほぼ同時期に、賢治はチエとの結婚を考えていたのである。森は、賢治がチエと関わった時代が、露と関わった時期と同じであることを重視し、「一方を

極力拒否しながら一方を結婚の対象に考えていることによつて、私たちは、一方が、好ましくない女性であり、一方は好ましい女性であることを知るのに困らないはずである」とする。

チエは「あの人の白い足ばかりみていて、あと何もお話しませんでした」（森・前掲書）と語るようなひかえめな女性で、「賢治がまだ起床しない時間に訪ねてきたり、一日に二回も三回も遠いところをやってきたりする」（森・前掲書）とも書かれた露とはだいぶ趣が違う。賢治は「新鮮な野の食卓にだな、露のようにおひきて、あいさつをとりかわし、一椀の給仕をしてくれ、すつと消え去り、また翌朝やってくるといったような女性なら僕は、結婚してもいいな」と理想の女性について語り、また、「おれのセロの調子はそれをなおしてくれたり、童話や詩をきいてくれたり、レコードの全楽章を辛抱強くかけてくれたりするなら申し分がない」とも語っているが、それはチエにこそあてはまりそうだが、もちろん賢治は、「いつ亡びるか解らない私ですし、その女の人の人にしてからが、いつ病気が出るか知れたものではない」とも森に語ったというので（チエの兄の七雄も胸を患っていたため、いつチエが発病してもおかしくなかった）、同じ病気であるという認識が結婚を意識させた部分もあるかもしれない。しかし、我が身を省みれば、「信仰と奸詐とのふしぎな複合体」と言わざるを得ないことは、十分に自覚できたはずだと思う。賢治が自身の恋愛を扱ったと思しき作品は、「文語詩稿 五十篇」中に数篇含まれているが、いずれも空想的で、虚構部分が多いように思う。本作はそんな中で、最も生々しく自分自身の恋愛を描いたもののように思えるのである。

49 民間薬

たけしき耕の具を帯びて、
夜に日をつげる一月の、
しばしましろの露置ける、
はじめは額の雲ぬるみ、
やがては古き巨人の、

熊熊の皮は着たれども、
干泥のわざに身をわびて、
すぎなの畔にまどろめば、
鳴きかひめぐるむらびばり、
石の匙もて出できたり、

ネプウメリてふ草の葉を、
薬に食めとをしへけり。

語注

熊熊 北海道に生息するクマ。本州に生息するのはツキノワグマであるから、作品のモデルこそ農作業をしていた賢治だったかもしれないが、作品の舞台としては北海道が想定されていたのかもしれない。ちなみに花巻温泉の動物園には雄雌二頭のヒグマが飼われていたという。

干泥のわざ 「ひどろ」と読み、湿田のことを言ったのだろう。干泥は一般的な熟語ではなさそうだが、岩手郡雫石町に御明神干泥おみょうじんひじろという地名があり、福島県には干泥温泉ひじろというのもある。下書稿には「水田みづたのわざ」ともあり、「春と修羅第二集」の「一九 塩水撰・浸種 一九二四、三、三〇、」には「乾田かみか」と対比させて「湿田ヒドロ」が登場している。雑誌発表形では「卑泥」の字を宛てているが、江戸時代の会津で書かれた『会津農書』（佐瀬与次右衛門させよじえもん）によれば、「卑泥田」とは常に水が流れ込むような低地にある田んぼを指す（「冬水田んぼの歴史（1・2）」・秋川信弘・「稲と雑草と白鳥と人間と」<http://park17.wakwak.com/suh125/>・平成十六年一月一九日、二月十四日）とのこと。賢治は羅須地人協会時代に稲を作っていなかったが、小原忠（後掲）によれば、花巻農学校の「田は灌漑路の末端にあるため水の切れることが屢々あり、「水田担当の賢治は昼も夜も上流に出掛けて水引に苦労した」。「おそらくこの詩は夜通しの疲労でまどろんだ自分の夢を託したのでろう」としている。また、伊藤光弥（後掲）は大正十五年八月の北上川の増水や昭和二年四月の氾濫の際に、賢治の畑も冠水し、その復旧作業にあたった時の思いを込めて本作が成立したと考える。具体的な事実は特定できないと思うので、ここでは両説を参考として挙げるに留めたい。

額の雲ぬるみ 難解な表現で、伊藤（後掲）は「おでこ」のような形の雲を表現したものか」とする。また、「春と修羅 第三集」の「野の師父」には、「あなただの額は雨や日や／あらゆる辛苦の図式を刻み」という句の後で、「一瞬あなただの額の上に／不定な雲がうかび出て／ふた、び明るく晴れるのは」とあり、

困惑した表情の意味に用いる例もあるが、ここでは寝ころんだ時に額のあたりに見えた雲のことを言っているのだろう。「ぬるみ」は、融けるように形を変えたのだと解したい。

古き巨人 夢の中に現れたいにしえの大男。下書稿(一)に「おほびと」とルビを振っているが、定稿でも音数の関係からそう読ませたのだと思う。田口昭典(後掲)は「東北地方の先住民」、「縄文人の師夫」を、天沢退二郎(後掲)は「山の神」だとし、「その前身は熊である」とする。また王敏(後掲)は、中国由来の農業の神である神農を見ている。「春と修羅 第二集」の「九九 〔鉄道線路と国道が〕 一九二四、五、一六、」に、「この国に昔から棲んでゐる／三本鍬をかついだ大きな人が」とあり、本作との発想の近さを感じさせることから、田口説に最も説得力があるように思う。また、「〔鉄道線路と国道が〕」の二日後の日付がある「一〇六 〔日はトパーズのかけらをそぎ〕 一九二四、五、一八、」の下書稿(一)には、「そこに棲む古い鬼神の気癖を稟けて」や、「鏡の面にひとりの鬼神ものぞいてゐる」といった句があり、手入れ段階で「ひとりの鬼神」は「ひとりのアイヌ」に、また「沼はむかしのアイヌのもので／岸では鍬も石斧もとれる」といった手入れが施されていることもわかつている(下書稿(二)で「アイヌ」が「葉叉」に改められているが、これは古代インドの半神半鬼である「夜叉」のことで、残念ながら葉草との関係はなさそうだが)。賢治はこの日の午後十時から農学校の生徒を連れて北海道への修学旅行に旅立っているのだ、それが影響しているのだろう。賢治が旅行後に学校へ提出した「〔修学旅行復命書〕」によれば、北海道大学の植物園博物館で、「道産の大なる麗熊の剥製」を見、「アイヌに関する標本」を見たことが記されている。また梅木万里子によれば(「北海道修学旅行」についての新資料とその意義」・弘前・宮沢賢治研究会誌7・平成二年十二月・弘前・宮沢賢治研究会)、修学旅行に同行した白藤慈秀の日記に、白老でアイヌ酋長宅を訪ね、熊祭りの由来や使用道具などの説明を受けたという記録もあるとのことだから、賢治のアイヌに対する関心が深かったことは十分に予想できる。これらのことから、本作における「古き巨人」が、東北の先住民であったアイヌのことをイメージしな

から書いたとして、ほぼ間違いないように思う。ただ、太古であっても東北にヒグマが生息していなかったのは現在と同じで、舞台までもが東北であったとは断言しにくい。ただ、ネプウメリというアイヌ風の語を使った(造語した?)のと同じように、アイヌを連想させるために、敢えて彼らの多くが住む北海道をイメージさせようとしてヒグマを持ち出したのかもしれない。

ネプウメリ 通称・学名ともにふさわしいものが見つかっておらず、田口(後掲)はネペンテスという英名を持つ「ウツボカズラ」を、伊藤(後掲)はネペンテというワイン飲料に使ったポリジと呼ばれるハーブ、またアヘンを意味した可能性についても考えている。一方、赤田秀子(後掲)は文語詩の内容に似通ったアイヌの伝承を持ち、ヌベ草とも呼ばれることがあったギョオジャンニクではないかとする。興味深い説だが、夢の話に必ずしもリアリティは必要でないこと、また、ギョオジャンニクがモデルであったとしても、それを敢えて(?)別の造語で言い換えていることの意義を考えると、モデル探しはあくまで参考程度に留めておくべきなのかも思う。

大意

猛々しい農耕具を身に備え、ヒグマの皮でできた服を着てはいるけれど、夜も昼もないほどに働いたこの一ヶ月間、さすがに農作業で身体は疲れ果て、しばしの間、白い露のついたスギナの生えた畦でうとうとしていると、まず額のあたりに見える雲が形を変え、ヒバリたちの声が飛び交っていると思ううちに、

大昔の巨人が、石の匙を持って現れ、

ネプウメリという草の葉を、薬として飲みなさいと教えてくれた。

モチーフ

童話「鹿踊りのはじまり」に倣えば、本作は「民間薬のほんたうの精神」が、労働に疲れた農夫の白昼夢の中で明らかにされる話、ということになるかもしれない。つまり、心象スケッチ時代の創作哲学が文語詩として書かれていることにな

り、本作が初めて賢治が世に問うた文語詩であることを思うと、自分自身の思想が一貫していること、しかし、表現は変化していることを宣言するつもりがあったのかもしれない。また先住民族であるアイヌ民族・文化に対する敬意と、それを衰えさせてしまったヤマト民族を相対化する視点も窺えるように思う。

評釈

『女性右手』発表形、黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿と定稿の三種が現存。『新校本全集』によれば、漢字とかな、句読点・ルビの有無を除けば三種にあまり差はないが、比較してみると発表形だけが異質だとしている。賢治が最初に発表した文語詩のうちの一つで、『女性右手』創刊号(昭和七年八月十五日・多田保子)に掲載された。

先行研究は小原忠『女性右手』と賢治作品(『賢治研究8』・昭和四十六年八月・宮沢賢治研究会)、吉本隆明『孤独と風童』、『再び宮沢賢治の系譜について』(『吉本隆明全著作集15』・昭和四十九年五月・勁草書房)、岡井隆『文語詩の発見』(『文語詩人 宮沢賢治』・平成二年四月・筑摩書房)、田口昭典『文語詩に見る縄文』(『縄文の末裔・宮沢賢治』・平成五年五月・無明舎)、伊藤光弥『民間葉』(『宮沢賢治 文語詩の森』・平成十一年六月・柏プラノ)、天沢退二郎『なめとこ山の熊』再考の試み『荒獵師伝承』と賢治童話(『賢治研究80』・平成十一年十二月・宮沢賢治研究会)、王敏『神農との出会いを中心に』(『宮沢賢治と中国 賢治文学に秘められた、遙かなる西域への旅路』・平成十四年五月・サンマーク出版)、赤田秀子『ネブウメリって何?』(『ワルトラワラ22』・平成十七年八月・ワルトラワラの会)、島田隆輔『再編論』(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』・平成十七年十二月・朝文社)などがある。

伊藤(前掲)は、先行作品として『春と修羅 第二集』の「二九 休息(一九二四、四、四)」を挙げる。下書稿(一)の初期形態を示しておきたい。

中空は青くうららかなのに

西嶺の雪の上ばかり

ぼんやり白く淀んでゐる

そこにいくつもの雲の肖像画

……それはみな(一字不明)に

巨大な洪積人類の

方向のない Jibdo である……

ひばりはあちこち啼いてゐる

氷と藍との東嶺山地から

つめたい風が吹いてきて

(おまへはわたしを犯してもいい)

つぎからつぎとまことをちかひ

またあかしやの棘ある枝を鳴らしたり

すがれの禾草を顛はせる

……そこに三本よもぎの茎が

素樸な木杏のおどりをつくる……

(エッコロ クアア)

風を無数のガラスの渦が浮き沈み

雲の肖像画はゆるやかに北へながれる

(eccolo quat)

「ひばりがあちこち啼いてゐる」中を、雲が「巨大な洪積人類」に姿を変え、「つぎからつぎとまことをちかひ」という内容は、まさに本作の原型と言えそうだ。しかし、これに類した内容を、賢治は口語詩「休息」(おそらくは「二九 休息」の発展したもの)や「七一四 疲労 一九二六、六、一八」、「西の山根から」(「黒い巨きな立像」が出てくる)、「七三三 休息 一九二六、八、二七」(ここには「熊」が出てくることを、伊藤(前掲)は指摘している)にも描いている他、童話「山男の四月」(一九二二、四、七)にも似た場面がある。賢治が原初的な体験をしたのがいつなのか。それは一回限りのことであったのか、それとも複数回であったのか。また、虚構やパラフレーズがどのようになされているのか…と問題は多く

残っているが、現時点でこれ以上の追究をするのは難しそうだ。

ここでは制作時期が早く、散文であるためもあって、最も具体的で、制作の舞台裏までわかるように思える「山男の四月」を挙げてみたいと思う。山男は「にしね山」で一仕事（農作業）を済ませると、

山男は仰向けになつて、碧いあをい空をながめました。お日さまは赤と黄金でぶちぶちのやまなしのやう、かれくさのい、にほひがそこら流れ、すぐうしろの山脈では、雪がこんこんと白い後光をだしてゐるのです。

（飴といふものはうまいものだ。天道は飴をうんとこさえてゐるが、なかなかおれにはくれない。）

山男がこんなことをぼんやり考へてゐますと、その澄み切つた碧いそらをふわふわうるんだ雲が、あてもなく東の方へ飛んで行きました。そこで山男は、のどの遠くの方を、ごろごろならしながら、また考へました。

（ぜんたい雲といふものは、風のくあひで、行つたり来たりぼかつと無くなつてみたり、俄かにまたでてきたりするもんだ。そこで雲助とかういふのだ。）

そのとき山男は、なんだかむやみに足とあたまが軽くなつて、逆さまに空気のなかにうかぶやうな、へんな気もちになりました。もう山男こそ雲助のやうに、風にながされるのか、ひとりでに飛ぶのか、どこといふあてもなく、ふらふらあるいてゐたのです。

というように、雲の変化を眺めているうちに、山男はいつしか眠りにおちる。彼は中国人の陳にだまされて六神丸にされそうになる夢をみるのだが、文語詩では同じ薬ではあつても、ネプウメリの薬効を教へてもらつたというものに転じている。「山男の四月」は、一時は童話集のタイトル候補ともなつていた作品であるが、賢治が発表した初めての文語詩も本作であることから、この経験に対してかなりの愛着があつたことが窺える。

島田隆輔（前掲）は、「民間薬」を「徒勞」を身に刻んで生きるしかない農民にせめて与えられたのが、古代以来の幻の生薬であり、しかもその薬効高い薬が微睡のなかの、夢の啓示にすぎぬ」とするが、賢治にとって「夢の啓示」の位置付けは

もつと高かつたように思う。というのも作業や歩行の後に休息した際、夢とうつつの境でへ向こうからやってくるものゝを記述することは、今まであげてきた諸作品にとどまらず、賢治の創作活動の本質的な部分に関わるものだと思うからだ。

例えば「鹿踊りのはじまり」では、

わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。

というようにして物語が始まっている。「民間薬」をこれにあてはめれば、労働に疲れた農民の夢の中に、民間薬の「ほんたうの精神」が語られたということになる。これは童話風のレトリックだと思われがちだが、賢治における創作（というよりも声なき声の採録に近い）の原理と密接に関わつてゐると思われ。『注文の多い料理店』の広告らしには、「これらは決して偽でも仮空でも窃盗でもない。多少の再度の内省と分析とはあつても、たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである」といった言葉があるが、その忠実な現れがこうした表現を生んでゐるのであろう。

大正十二年八月に刊行された知里幸恵の『アイヌ神謡集』（郷土研究社）は、賢治が読んだ可能性の高い本だが、秋枝美保（『アイヌ神謡集』と賢治の童話 鬼神・魔神・修羅の鎮魂）・『立命館言語文化研究16—3』・平成十七年五月・立命館大学国際言語文化研究所）によれば、『アイヌ神謡集』における「わたし」が語るのではなく、「わたし」の向こう側にあるものが語る声に耳を傾けるといふ、声なき声を聞くという方法」に賢治の創作姿勢との類似があるという。賢治の物語の起源に山男や巨人、アイヌが関わる例が多いということは、同書から決定的な影響を受けていた痕跡なのかもしれない。

いずれにせよ、心象をスケッチすることから物語や詩が生まれようとするまさにその瞬間を記録しようとしたものが本作であるということが許されるならば、大げさに言えば、これまで賢治が世に問うてきた詩や童話の創作活動を、もう一度世に問い直そうと、しかし、今までは全くちがった言語によつてそれをなそうとしたのが本作であつたということもできそうだ。とすれば文語詩第一作として、満を持

して本作を発表した賢治の気持ちも理解できるように思う。

ところで、『アイヌ神謡集』は、

太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて、野辺に山辺に嬉々として暮らしていた多くの民の行方も亦いずこ。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世の様にただ驚きの眼をみはるばかり、しかもその眼からは一挙一動宗教的観念に支配されていた昔の人の美しい魂の輝は失われて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おお滅びゆくもの、それは今の私たちの名、なんと悲しい名前を私たちは持つているのでしょうか。

という序に始まるが、賢治もアイヌを「滅びゆくもの」であると捉えていたとすれば、彼らを「滅ぼしたもの」についても、当然、目は向いていたはずである。島田（前掲）は、本作に「この国の近代化が、必ずしも農村を救済していない、という告発」を読み取っているが、知里幸恵による静かな近代日本批判に似た思いは、確かに本作の中にも流れており、「(う)からもて台地の雪に」における太古のアイヌ賛美と共に、本作には近代日本を相対化しようという発想の芽を見ることができようと思う。

50 「吹雪かゞやくなかにして」

①吹雪かゞやくなかにして、 まことに犬の吠え集りし。

②燃ゆる吹雪のさなかとて、 妖しき眸をなせるものかな。

語注

眸 下書稿には「まみ」のルビがある。定稿でもそう読ませたかったのだろう。『大漢和辞典』によれば「みる」の意味だというのが、ここでは瞳のこと。下書稿(二)には「妖しく燃ゆるグリムプス」ともあるが、島田隆輔の教示によれば、ギリシヤ神話における獅子の胴体にワシの頭と翼がある架空の生物であるグリ

ユプス(グリフォン)である可能性もあるのではないかとのこと。

大意

吹雪がかがやいているその中で、犬が集まって何ごとか吠えだしている。

吹雪が炎のように見えるその中に、妖しい光をおびた瞳をしたものがある。

モチーフ

花巻農学校の教員は、近隣の小学校で「学校の集り」をしていたというが、こうした集まりに本来に出席しなければならない人は、実は出席することもできず、また、既に農業に未来を託すことさえも諦めてしまっていた。室内をのぞき込もうとする妖しい「眸」の持ち主であった農夫の存在は、賢治をいたたまれなくさせたに違いない。

評釈

黄野(222行) 詩稿用紙に書かれ、「峠」と題された下書稿(一)、その裏面に下書稿(二)、余白に下書稿(三)、そして定稿の四種が現存。生前発表なし。先行研究なし。「文語詩稿 五十篇」最後の作品は、七五七七、七五七七という調子の短詩である。先行作品は、『新校本全集』には書かれていないが、『新校本全集 第五卷』に収められた口語詩「(馬が一疋)」であるように思う。口語詩の下書稿(一)は左のとおり。

ははあやつぱりあの人だ

見てゐる見てゐる

吹雪の向ふで瞳が二つ

ちがった世界の窓のやう

じつとこつちをのぞいてゐる

馬の髪はばしゃばしゃ

一駄の米をせい一杯に

下ばかり見てとほとほと来る

「馬が一疋」の下書稿(□)の手入れには、「マイナスのシロッコ」とあり、これは「文語詩 五十篇」の「(さき立つ名譽村長は)」における「過冷のシロッコ」と対応していると思われる。両作はまた、なにがしかの「学校の集り」を舞台としていることでも共通しているため、小学校での取材だと思われる。「(さき立つ名譽村長は)」と、同日の取材に基づくものだといいように思う。この仮定が正しいとすると、口語詩「馬が一疋」は、『新校本全集 第五卷』所収の口語詩稿(□)「職員室に、こつちが一足はいるやいなや」、「(めづらしがって集ってくる)」、「(四信五行に身をまもり)」と同日の取材に基づく作品群のうちの一つだということになり、同日の取材に基づく文語詩は「文語詩稿 五十篇」には、「雪うづまきて日は温き」、「(氷柱かやく窓のべに)」、「(来賓)」、「(さき立つ名譽村長は)」の四篇に加え、もう一つ増えることになる。

それにしても、「馬が一疋」を含めて、全てが『新校本全集 第五卷』の口語詩稿として収められた作品であり、またここに集められたものは、この一連の作品に限らず、かなりの確率で文語詩化されている。これらの口語詩稿と文語詩稿の関係については改めて考える必要があるだろう。

さて、「馬が一疋」は、吹雪が止む寸前の、光が差してきた状態を背景にした作品であるが、文語詩では馬の代わりに犬を登場させ、彼らを吠えさせることで異なる雰囲気をもたせようとしている。加えて、妖しい眸の持ち主が人間であるということさえ示していないのは、不気味さをいっそう引き立たせようとしているからだろう。

ところでこの不気味さ・妖しさとは、もちろん気象状況がもたらしたものであろうが、決してそれに留まっただけではない。というのも、口語詩の下書稿(□)から推敲を重ねられるうちに、窓の外にいる男の「眸」が賢治に向かって何を訴えたかったのか、だんだんはつきりしてくるように思えるからだ。下書稿(□)はこのように変化している。

ひかかって低い吹雪を

馬が一疋

米を一駄大じにつけて

何かふしぎな沼でもわたるといふやうに
しづかにこつちへあるいてくる

ひいてくるのは

下鍋倉の吉とかいった

顔があかくて

上唇が蓮華の花弁のかたちになって

いつかの寄り合ひで

鯉の卵のことなど談してゐたあの男

今日は学校の集りにも出ず

何かの入費を米でつくりに出たところ

一般の農民たちも自由に参加できた「学校の集り」(同日の取材に基づくと思われる文語詩「来賓」の下書稿(□)のタイトルに「新年」とあったことから、賢治が小学校の「新年会」に招かれた際の作品であった可能性が大きく、事実、賢治が小学校で催された新年会に出席したことは、『新校本全集』の「年譜」でも確認できる。ただ、本作の場合は、花巻農学校が各地の小学校などで催すことがあったという農事講演会だったとした方がイメージしやすい。賢治は同日の取材に基づいて、文語詩「雪うづまきて日は温き」を書いているが、ここでは県会議員の葬儀として描いているので、同じ素材を新年会、葬式、農事講演会の三種に分けた可能性もあると思う。もちろんその逆で、いくつかの実体験が重なり合った可能性もある(「下鍋倉の吉」が出席しないことを、賢治は不思議に思ったのだろう。「いつかの寄り合ひ」でも、熱心に鯉の卵… おそらくは自らの趣味のためのものではなく、食用か観賞用の農産物としての鯉の話をしていただけに、その日の「集まり」に出席しないのは不自然であった。しかし、出席しない理由は馬の荷物を見ればすぐにわかる。現金が必要となったために、米をどこかに売りに行く必要があったからだ。それなのに吹雪の中を、わざわざ小学校の窓近くまでやってきたのはなぜだろう。それだけ中の様子が気になっていたためなのかもしれない。

やっぱり鍋倉のあのんだ

向ふもこつちをかんがへてゐる

五十駄の収穫が六十駄になつても

かくべつくらしは楽にならないと

あきらめたやうなわらひを

蓮華の花びらの形の唇にうかべ

しづかに吹雪をわたつてくる

農事講演会は、今日で言うところの社会人講座のようなものだったが、子弟を農学校に進学させようと考えたり、最新の科学に興味を持つような人たちは、賢治の目からすれば貧しい生活をしているように見えても、比較的余裕のある家に限られていたという。つまり、本当に農業技術の指導をしなくてはいけない存在は、目の前にはいなかったのである。真に語りかけたい相手を前にして何も言えないでいた賢治に、農夫の「畦」は何にも増して印象深いものだったように思う。

Explanatory Notes on Miyazawa Kenji's *Poems in Literary Style 50* Part 10

NOBUTOKI Tetsuro

Abstract : This is the 10th of the serial of explanatory notes and critical comments, with translation into modern language, on *Poems in Literary Style 50* written by Miyazawa Kenji in his later years. In this paper, the five poems of his, “Kimiwo Makiyame Wani Narabe” (“Stop Seeding Corn and Stand Up in a Circle”), “Ukaramote Daichino Yukini” (“A Clan Living on the Edge of the Snowy Plateau”), “Monadnockno Yukino Ueni” (“On the Snow of Monadnock”), “Minkan Yaku” (“Folk Medicine”), “Fubuki Kagayaku Nakanishite”, (“In the Shining Snow Storm”).